博士論文要旨

「口頭発表における質疑応答コミュニケーションに関する研究」

文学研究科言語科学専攻日本語教育学専攻分野博士課程後期 3 年

B2LD1026 仁科　浩美

プレゼンテーション（以下、口頭発表）が教育やビジネスの場において欠かせない活動になっているが、口頭発表に続く質疑応答に対しては苦手意識を持つ学生が多い。

本論文は、口頭発表時における質疑応答について、質疑と応答が円滑に進行しないコミュニケーション・ブレイクダウン（以下、CB）の実態を明らかにすることを目的に、発表者である理工系博士課程前期の学生及び質問者である教員の意識・態度、そして実際の質疑応答の会話データを分析・検討したものである。

本研究では、CB を「会話において、言語及び非言語によって表された相手の表現の意図・意味が把握できない、相手の意図を誤解した等により起こる、当事者間でのコミュニケーションが前に進まない、停滞の状態」と定義した。

研究にあたっては、3 つの研究課題を掲げた。以下、3 つの課題の分析・検討結果について述べる。

【課題1】修士課程の学生は、口頭発表の質疑応答に対し、どのような意識・態度を持っており、どのような点で困惑しているのか。

質的な面から個々人について詳細に分析すると、そこには多様な意識・態度が確認できること、そして、博士前期課程から博士後期課程へと課程が進行することによって、質疑応答への意識が肯定的なものへと変化していくことがわかった。

具体的に述べると、修士課程中期段階の留学生のデータからは、生活日本語から研究場面での日本語の違いに苦労し、発表したい気持ちと躊躇する気持ちが交錯する姿や、考え方の違いを知るのが面白いと、質疑応答を肯定的に受け止める姿が捉えられた。ただし、後者の場合でも日本語表現は他者の言い回しを模倣しており、まだ完全に自立しているわけではないことがわかった。

また、修士課程修了段階においては、日本人学生と留学生は、双方とも教員と学生との関係から生ずる躊躇や遠慮、わかりやすく説明することに難しさを感じている。さらに留学生は、質疑応答場面での日本語理解・運用、動転による日本語の忘却や、機能的表現の不適切使用、方言の聞き取り対応といった日本語に関する点で問題を感じている。

一方で、日本人学生には、研究と社会との関わりや、エンジニアとしての職業意識もうかがえた。

さらに、課程が進み、博士後期課程になると、質疑応答を肯定的に捉えるようになるが、質問者側からの的外れな質問や、簡潔でなく、要点が不明確な質問、一度に複数の質問をされた場合等が挙げられ、その扱いに各自工夫はあるものの、未だ困惑する様子が見られた。

さらに、因子分析による量的な側面からは、質疑応答時の困難点として、質問を受け取る受信に関して5因子（「傾聴力」、「専門内容に対する理解の差」「発生事象への受容力」「背景の異なる者への対応」「発話意図の読み取り」）が、質問に対して回答することに関して4因子（「参加者を意識した緊張・不安」「機器操作」「失態回避の消極的回答」「不十分な理解での回答」）が抽出された。また、質疑応答は有益な時間であることに気づいてはいるが、実際は質疑応答の際に見せるためのスライド作成に意識が向いており、言葉で説明する、あるいは専門的な内容を深めるといった点には意識が及んでいないことが示唆された。

【課題2】修士課程の学生は、質疑応答で対応の困難さを感じ、コミュニケーションが停滞したとき、どのように振る舞っているのか。

因子分析による9つの困難点について、発表者の振り返りデータをもとに該当する部分を実際の質疑応答場面から抽出し、15の事例について検討した。学生の回答が質問者である教員にとって理解困難な、あるいは、不十分な場合、教員側にCBが発生する。この場合、教員自らが聞き返し、言い換え、明示的な否定などにより修復行動を開始していた。また、学生が回答できずに沈黙や言いよどみの状態にいる場合も、教員による会話の復帰に向けた修復行動が見られた。つまり、学生からの行動開始は少ない。しかし、教員が学生の背景をよく把握していない場合には、的確な情報を送ることは難しく、会話は復帰には至らなかった。これを改善するためには、研究は当該学生自身が行ったものであるという意識から、CBに陥った学生側からも不明な点について情報を発信する必要があり、より積極的に質問者とインターアクションを行い、CBの解消に努めるべきであると思われた。

【課題3】質問する立場になることが多い教員は質疑応答にどのような意識・態度で臨んでいるのか。

教員14名に対しインタビュー調査を行い、検討した。質疑応答の意義については、調査対象が修士論文発表会であったことから「評価」がまず挙げられたが、そのほかには研究の成果を支援・誘導する場、参加者の理解を共有する、疑問を解決するための時間といったものが述べられた。総合的に見ると、質問者である教員は、教育的観点から発表者である学生の発表をより意義のあるものにしようとする態度で臨んでいることがわかった。

また、専門内容の理解に差があるとき、あるいは、見解に相違があるときに、CBが発生した場合の学生の対応については、積極的に教員に説明を試みるのが良いとする意見から衝突を回避するのが良いという意見まで4つに分類され、反応は一様ではなかった。臨機応変な対応が必要となると思われるが、このような場合、どう相手を尊重しながら意見を述べるべきか、アサーティブなコミュニケーションのあり方を検討する必要があると思われた。

論文審査結果の要旨および担当者

提　　出　　者	仁科　浩美
論文審査担当者	（主査）教　授　　才田いずみ 教　授　　名嶋 義直 教　授　　小林　隆 准教授　　田中 重人
論　　文　　名	口頭発表における質疑応答コミュニケーションに関する研究

本論文は，これまでほとんど研究されてこなかった理工系の修士論文発表会での質疑応答コミュニケーションの実態と参加者の意識に，多角的な手法で迫った意欲的な研究である。

論文は８章から成り，第１章「序論」では，研究の背景と目的，研究方法を述べ，第２章は範囲を絞って先行研究を扱う。第３章から第６章が本論文の中核で，第３章では修士課程の学生の質疑応答に対する意識に関する質的データを，第４章では質問紙による量的データを分析・考察している。第５章は質疑応答の実際と当該学生の振り返りインタビューからの分析で，第６章は教員の質疑応答への意識・態度を半構造化インタビューで探っている。第７章は調査結果を踏まえて，コミュニケーション教育に提言を行い，第８章「総括」で全体をまとめている。

研究目的は，口頭発表の質疑応答場面で見られるコミュニケーションが円滑に進行しない停滞の状態――コミュニケーション・ブレイクダウン（以下 CB とする）――の実態を明らかにすることで，３つの具体的課題――１）修士課程の学生の質疑応答に対する意識・態度，２）CB が生じた際の修士課程の学生の振る舞い，３）質問者である教員の質疑応答に対する意識・態度――を設定している。

１）については，質的調査から，留学生にも日本人学生にも，自分よりも専門知識のある教員に説明することに対して躊躇や遠慮があること，一部には教員に依存する意識や「それは今後の課題です」と言って質疑を打ち切ろうとする姿勢のあることも窺えた。量的調査では因子分析の結果，質問を受ける際には「傾聴力」「専門内容に対する理解の差」「発生事象への受容力」「背景の異なる者への対応」「発話意図の読み取り」に，回答に際しては「参加者を意識した緊張・不安」「機器操作」「失態回避の消極的回答」，質問の「不十分な理解での回答」に問題があることが明らかにされた。

２）については，修士論文発表会での 38 名（うち 12 名は留学生）の質疑応答から CB をもたらす上記の９つの問題が出現した 15 事例を取り上げ，CB 発生後やりとりがどう展開したかを，学生の振り返りと合わせて検討している。その結果，CB は教員が修復を試みることが多く，学生は，質問の意図が掴めない場合でも，聞き返し等の積極的修復行動をとらない傾向が示された。

３）については，修士論文発表会での質疑には評価的な面もあるが，教員には，学生の発表内容を明確化して場で共有し，その意義を十分に引き出そうとする教育的な意識が強いことが分かった。

本研究は，理工系分野の修士論文発表会での質疑応答をめぐって，学生側と教員側双方の質疑応答に対する意識・態度を多様な手法を使って収集・分析した上で，やりとりの実際とそれに関する学生の振り返りを加えて，質疑応答の当事者双方の意識にギャップがあることや，学生の沈黙や言いよどみの裏にさまざまな意識があること等を実証的な手法で明らかにしている。その成果は，日本語教育やアカデミック・ジャパニーズ教育の発展に大きく貢献するものである。よって，本論文の提出者は博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。